

広報うつく

特集

学びの共同体のまち牛久
 企画 戦略的広報特定プロジェクト
 発行日 平成24年1月1日

目指せ、学びの共同体のまち

学びの共同体が子どもと地域の未来を開く

学びの共同体の提唱者佐藤学教授が牛久で講演

学び合いは世界の潮流

全小中学校での取り組みに敬意

牛久市は平成17年度から全小中学校で「学び合い」を導入しており、その成果は、子どもたちの学力が文科省の全国学力テストで全国1位の県とほぼ同等の高いレベルにあるという形になって現れています。

学び合いは生徒が学び合うだけでなく、先生方も一人一人の生徒にどのように学びを保障していくかを絶えず学び合い、学校を学びの共同体として育てていく取り組みです。いま、日本はもとより欧米やアジアに急速に広がっており、昨年、牛久市に中国、インドネシア、シンガポール、韓国から相次いで教育視察団が訪れました。

この学び合いと学びの共同体づくりを提唱し、世界的に高く評価されている教育学者の東京大学大学院佐藤学教授が、昨年8月、牛久市教育講演会で「学び合いから学びの共同体へ」というテーマで講演しました。「学びの共同体は子どもと地域の未来を開く」と佐藤教授は述べました。牛久市をそういう教育都市に導く学びの共同体とはどのようなものか。講演とパネルディスカッションの要旨をお届けします。

佐藤教授の講演要旨（1〜3ページ）

牛久市は13の全小中学校で学び合いによる学びの共同体づくりを進めており、その結果、生徒の学力は県はもとより全国的にもトップレベル。荒れた学校は1校もないという貴重な成果が生まれています。これは市、教育委員会、先生方が心一つにして新しい教育



牛久市教育講演会で講演する佐藤学教授

トップ校は地方都市に 欧米では見られない一斉授業

私は過去32年の間に、日本では約2500校を訪問し、1万以上の教室で授業を観察。海外でも27カ国500校ぐらいの学校を観察し、授業の写真を撮ってきました。15年ほど前その写真を整理していて、ハッ

と気づきました。世界で同時に教室の変化が起こっているのです。この変化は1970年代にカナダで始まり、アメリカ、ヨーロッパに伝わり、いまアジアに広がっています。小学校1、2年生は円

で、保護者、市民、学校が一体となって21世紀型の学校づくりに挑戦したことから始まりました。市議会がこの取り組みを市全体の改革として議決し、市長もそれを宣言、教育委員会がそれをリードしました。この改革は、その後数年にわたってテレビ、新聞、雑誌が頻りに採り上げ、日本に学校改革の潮流を生み出す大きな一歩となりました。

その2年後、いま牛久市の学び合いを指導しておられる佐藤雅彰先生が、困難校として有名だった富士市立岳陽中学校で、校内の荒れを無くしただけでなく、最低だった学力を市内トップに押し上げるという改革を成し遂げ、学びの共同体づくりが日本全国に広がり始めました。

いま日本では小学校で約1500校、中学校で約2000校、高校でも約200校が学びの共同体づくりを進めています。どの学校でも生徒は真摯に学び、学力は飛躍的に向上しています。不登校は激減しています。

アジア諸国にも急浸透

基本は全て学びの共同体理論

欧米では、世界で学力トップレベルのフィンランド、カナダ、オーストラリアや、最近ではイギリスやアメリカでも、学力レベルの高い学校ほど複式学級になっているのが目をひきます。

この秘密は学び合いにあります。小学校2年生の子どもは3年になると、いきなり4年の教科書を使いませう。それを2年間やるのです。3年の教科書を2年間使ってはダメです。高いレベルに学び合いで挑戦するのです。教える内容を半分にしなければならぬから効率は悪いのです。しかし学びの質は高まります。

アジアも急速に変わりつつあります。1990年代までは、日本が先頭を切って変わり、それからアジア諸国に広まるだろうと思っ

学力ダントツ世界一の上海

全市で学び合い導入

中国には2006年の人民大会に招待され、講演を行いました。人民大会堂ではクリントン元米大統領と同じ待遇を受けました。そのくらい学び合いに力を入れていたのです。

昨年訪問したハルビンではすべての小中学校が学びの共同体づくりを進めていました。小学校5年の算数では2元連立方程式、小学校3年の英語では関係代名詞を使った英作文をやっ

ていました。中国は日本より4、5年レベルの高い教育内容で教えています。今年訪問した上海も、教育委員会が学びの共同体を学校政策として導入し、全市をあげて学び合いを行っています。上海は最近のPISAの調査でダントツの学力世界一になりました。

調べてみたら学び合いをやっている学校の成績がすごく良く、旧来の競争型受験教育をやっているところは良くありません。それで一挙に政策転換したのです。



牛久市に中国、インドネシア、シンガポール、韓国などから教育視察団が次々に訪れている。

21世紀が求める学びの共同体

劣悪化する成育環境、学校は子どもを支える中核機関

知識・多文化社会に対応

大部分の働き口が対人サービスに

学びの共同体は21世紀が求めている学校です。21世紀の社会は大きく変化しています。私たちが中学生だったころ、日本の労働市場は70%が工場労働者でした。しかし現在は16%。OECDの予測では10年後には4%になってしまいきます。

ほとんどの働き口は情報産業や流通産業、医療・福祉・教育・文化などの対人サービスになります。すべての子どもたちが高いレベルの知識や技能を身につけ、しかも生涯にわたって学び続けなければ、社会参加が難しくなる。そういう社会になるのです。

この変化に対応するために、新しい学習指導要領は①知識基盤社会への対応②多文化共生社会への対応③格差・リスク社会への対応④成熟した市民社会の建設⑤市民性（シチズンシップ）・公共モラルの確立を教育に求めています。これはOECD30カ国のナショナルカリキュラムにほぼ共通しています。

このうち昨今の日本で特に必要なのは③と④だと私は思っています。かつて、日本は貧富の差が最も少ない国の一つでした。しかし現在、先進国で

このような社会を築くために、いま学校はどのような変化を遂げつつあるか。一言でいえば、21世紀の学校は質と平等の同時追求が課題になっています。これまでには質を追求すれば平等が破壊され、平等を追求すれば質が落ちると考えられてきました。しかし現実はずいぶん違います。

PIISAの調査で学力が世界のトップレベルにあるフィンランド、カナダ、オーストラリアなどに共通しているのは、質と平等を同時に追求していることです。フィンランドは世界一授業時間が少ないです。しかし教育内容が精選されています。もはや量の時代は終了

年の調査ではOECD30カ国の中で貧困層の最も多いのはトルコ、次はメキシコ、その次はアメリカ。日本はそのアメリカと同程度という状況です。小中高校生の17%が貧困層で、東京、大阪などでは30%を超えています。離婚率の高さもフランスやドイツを抜いて世界の最高水準まで来てしまいました。

子どもの生育環境が一挙に劣悪化している中で、誰が子どもたちをケアし、その将来を支えていくのか。それが社会全体の問題になっています。学校はその中心的な機関の一つです。子どもたちが一人残らずケ

質と平等を同時に追求

授業の中心は協同的な学びへ

アされ、一人残らず学びの権利を保障される学校をどうつくるか。それが緊急の課題になっているのです。

グローバルゼーションの社会は国家の枠を超えて市民社会がむき出しになる社会であり、個人が孤立させられやすくなります。日本の自殺率は韓国、ハンガリーに次いで世界第3位。一人一人が孤立し、周囲の援助を得にくい社会になっているのです。一人一人が孤立することなく、相互にケアし協働して問題を解決できる社会でなければなりません。そのためにどの国でもシチズンシップの教育を柱に据えています。

にリポートで評価するようになっていきます。もっと大きな変化は「協同的な学び」を中心とする授業になっていくことで

教育内容のレベルを高くして、なおかつ低学力の子どもが少なくない。これはなぜなのか。それを調べたくて上海の教室を20ほど見て回りました。要因は二つありました。一つはやはり学び合いです。小グループでの協同的な学び合いが低学力の回復には一番有効なのです。

もう一つは、日本も学ぶべきだと思いましたが、どの授業でもクラスに何人かいる低学力の子どもに、必ず1回は発言させていました。だから低学力の子どもも明るいのです。

力の高い学校はほとんどが学び合いをやっています。しかし学び合いをやれば必ず学力が高まるわけではありませぬ。そういうところは教科内容のレベルが低すぎるのです。

易しくすればみんなが分かるようになるのではありませぬ。高いレベルに挑戦させながら、低学力の子どもたちを学び合いでサポートしていく。そういうジャンプのある課題での学び合いが大切なのです。

教育内容のレベルが高い国ほど、学力格差が少ない。私もさらに研究しますが、皆さんにも考えていただきたいポイントです。



牛久市の小中学校では4人1組またはコの字型での学び合いが普通だ。

PIISAの調査によれば、日本の子どもたちの学習意欲は世界でも最低レベルに近いところにあります。このため意欲の教育が強調されています。しかし

実は、学ぶ意欲の高い国ほど学力は低く、学力の高い国ほど意欲は低いのです。学ぶ意欲は経済成長率と相関すると私は考えています。産業主義の発展途上国

低学力の子どもの数が少ない

低学力でも高いレベルで授業

学び合いだから可能

低学力でも高いレベルで授業



地域の人々が毎日ウォーキングパトロールで小学生の登下校を見守っている。

オーストラリアなどが、なぜ国際学力テストで好成绩を収めているのか。それは教科書を見ればよく分かります。学ぶ意味がその中にしっかりと埋め込まれています。

これらの国のやり方でも一つ重要なのは、教育内容のレベルが高いこと。つまり難しいことを教えています。PIISAの調査を見ると、そういう国ほど低学力の子どもが少ないです。

フィンランドは低学力の子どもが少ないといいますが上海はもっと少ないです。学力レベルが一番低い子どもは、日本16%、17%、フィンランド8%、9%、上海はなんと4%です。

フィンランド、カナダ、

は意欲が高く、成熟社会に入った国は低いのです。学ぶ意欲の一番低い国はフィンランドです。この国は意欲より学ぶ意味を大切にしています。だから子どもが学びに夢中になるのです。

フィンランド、カナダ、

は意欲が高く、成熟社会に入

った国は低いのです。学ぶ意欲の一番低い国はフィン

ランドです。この国は意欲より学

ぶ意味を大切にしています。だから

子どもが学びに夢中になるのです。

フィンランド、カナダ、

は意欲が高く、成熟社会に入

った国は低いのです。学ぶ意欲の

一番低い国はフィンランドです。こ

この国は意欲より学ぶ意味を大切

にしています。だから子どもが学

びに夢中になるのです。

フィンランド、カナダ、

は意欲が高く、成熟社会に入

生徒も先生も成長し合える学校

学びの共同体を支えるビジョン・哲学・活動システム

**開かれていること・協同すること
一つ一つの思いや声を大切に
卓越性の追求が学びを豊かにする**

学びの共同体としての学校は、ビジョンと哲学と活動システムで支えられます。ビジョンがないと、どんな努力も無駄になりません。どんな学校をつくるのか、どんな教室をつくるのか、どんな授業をするのか。学びの共同体を築くにはそのビジョンをみんなで共有する必要があります。

子どもたちが一人残らず学び合い、先生方が一人残らず成長し合える学校、保護者や市民の最低8割に支援・信頼され、保護者や市民も学び合える学校——それが学びの共同体の理念です。



昨年秋、牛久市で関東地区小学校生活科・総合的な学習研究協議会茨城大会が開かれ、12の分科会で授業の実践発表が行われた。

ありビジョンです。

このビジョンを実現するには三つの哲学が必要です。一つは公共性の哲学。開かれていることと協同すること。すべての教師が1年に1回は同僚に教室を開き、教師同士も学び合う。そういう学校ができるかどうかカギです。

二つ目は民主主義の哲学。「そんなの、もうやってるよ」といわれるかもしれませんが、ほんとうにそうでしょうか。中学校の職員室で調査したことがありません。1年間に職員室で話題になる生徒の数は在校生の

1割。問題を起こす子、よくできない子、よくできる子、部活で活躍する子。そういう生徒たちばかりで、後の90%は忘れられていきます。どの生徒もどの先生も、

安心して学べる環境を 聴き合う関係が学びの基礎

具体的に学びの共同体づくりを進める上で大切なのは、対話的コミュニケーションの実践です。対話的コミュニケーションは、聴き合う関係によって実現します。他者の声を聞くことが学び合う関係づくりの基礎となります。

問いかける力を育てる 教師の仕事「聴く・つなぐ・もどす」

学び合いを進める上でいくつか重要なポイントがあります。まず、教師は学び合う場をつくる必要があります。子どものことをきちんと受け入れ、聴き合う関係をつくる。教師の仕事は「聴く、つなぐ、もどす」ことです。子どもと子どもをつなぐ、子どもと教材をつなぐ、今日学んだことと昨日学んだことをつなぐ。そうすることで、子どもをより高いレベルに導いてい

その思いや声の一つ一つ大切にされる。そういう学校に変えていかなければならないのです。

三つ目は卓越性の追求です。いつもベストを追求しないと教育は成功しません。妥協したらダメです。教師も生徒も与えられた条件の中で最高のものに挑戦する。その質の追求が学びを豊かなものにし、授業改革の推進力となるのです。

ただ、学び合いと教え合いは違います。「分かった人、教えてあげて」では生徒同士の関係が一方的になつて、学び合いが育ちません。「分らなかったら友だちに聞くんだよ」と、絶えず聞くことを勧めるのがポイントです。

基礎学力もジャンプから

学び合いには二つのレベルがあります。一つは共有し合う学び合い、教科書レベルの学び合いです。もう一つは、教科書を超越、ジャンプする学び合いです。ジャンプのある学びは、協同的な学びによって実現し、基礎、基本を確実なものにします。また、子どもを学び上手に育て、教師の専門家としての成長を促進します。よく「基礎から発展へ」といいます。確かに、できる子は基礎から発展へと伸びていくことができます。しかし、できない子は

専門家としての同僚性が 学びの共同体を育てる

学校を学びの共同体にするには、教師の学び合いも欠かせません。教師はお互いに教室を開き、授業の研究に取り組んでいただきたいと思えます。

「あ、こういうことだったんだ」と納得する。ジャンプする過程で基礎的なことを理解するのです。

学力は基礎学力が伸びて発展的学力が伸びるのではありません。先に発展的学力が伸び、後から基礎学力がついてくるのです。だからジャンプのある学び合いが大切なのです。

また、学力の向上には時間がかかりますが、向上するときは一気に向上します。だから焦らずじっくり取り組むことが大切です。



関東各地から450人の先生方が集まり、神谷小学校の生活科・総合的な学習の授業を参観した。

学びの共同体の学校改革は、子どもと地域共同体の未来を開きます。その改革は学校の内側で進められませんが、地域の支えがなければ持続できません。そういう意味で、学びの共同体について市民に理解を深めてもらう今回の牛久市教育委員会への取り組みは、非常に意義深いものがあります。

